京都大学	博士（文学）	氏名	宮坂真依子
論文題目	ラテン文学における文学的モチーフとしてのfides		

（論文内容の要旨）

本論文はローマ社会の基盤をなすと考えられた概念fides（「信義」、「信用」、「信頼性」、「誠実」、「忠誠」、「約束」、「誓約」）が文学作品の中でモチーフとしてどのように取り入れられ、どのような表現にあずかっているかを、英雄叙事詩、小叙事詩、喜劇それぞれのジャンルに属する作品に例を取って検討し、その文学的効果を検証することを通じて作品理解に寄与することを目的としている。

全体は序論、第１～４章、結論、補遺、付録、参考文献一覧からなり、第１～２章は第I部、第３～4章は第Ⅱ部としてまとめられる。序論は、これまでのfidesに関する研究がその概念、語義に重点を置き、文学的視点から捉えられてこなかったことを指摘し、その欠を補う試みであることを述べたうえで、文学作品でfidesがモチーフとして機能する場合を２つ挙げる。１つは、社会基盤としてのfidesがなんらかの理由で危機に瀕するような物語展開を見せる場合である。いま１つは、文学ジャンルの多くはそれぞれの常套、つまり、決まった約束事の上に成立していることに関わっている。約束事に忠実であることはfidesに即していると見られる一方で、約束事の型ないし殻を破らないかぎり、創造性は生まれない。このジレンマそのものがfidesを介して表現されるとすれば、それはメタ文学的な創作と見なされうる。第I部の２つの章が前者の場合として叙事詩２作品の例を扱い、第Ⅱ部の２つの章が後者の場合として小叙事詩１編および喜劇３作品の例を扱うことが示される。加えて、補遺はこれまでのfides研究を紹介して、その概念規定を確認し、付録は第３章の議論の補いとして対象詩編の邦訳と構成の図表を添える。以下、各章の概要を記す。

第１章はシーリウス・イタリクスの歴史叙事詩『ポエニー戦争の歌(*Punica*)』から第６歌でのレーグルスの挿話を取り上げた。レーグルスは第１次ポエニー戦争中にカルターゴーの捕虜となり、敵の捕虜将校たちとの交換要員として、交渉が成立しなければ再びカルターゴーに戻るとの誓約のうえで、ローマに送られたが、元老院で捕虜交換がローマに不利な提案だと自ら訴える。そしてこれを拒否することが認められると、誓約を守ってカルターゴーに戻り、残忍な拷問死を受けたとされる。自分の命を犠牲にして祖国の利益を図り、敵国それも欺瞞の悪名高い相手との誓約を守ったレーグルスはfidesの模範的体現者としてキケローによって称揚された。ところが、シーリウス・イタリクスはレーグルスの妻マルキアを挿話に登場させ、夫が敵へのfidesを守って、夫婦が約束したfidesをなおざりにすると嘆かせ、彼をperfidus「fidesを裏切る者」と呼ばせる。fidesを介して、立場の違いとそれに応じた考え方の違い、その相

違により一方では世に誇るべき栄光とも見える行為が他方で同時に暗い影ともなりうる皮肉が効果的に表現されていることを観察した。

第２章はウェルギリウスのローマ建国叙事詩『アエネーイス』から第４歌での英雄アエネーアースとカルターゴーの女王ディードーのあいだに介在するfides、並びに第８歌におけるアエネーアースとのちのパラーティウムに植民したアルカディア人の王エウアンドロスのあいだに結ばれたfidesとこれに関わる物語展開について考察した。

ディードーは亡き夫へのfidesを犠牲にして英雄アエネーアースとのあいだに新たにfidesに基づく庇護関係、主客関係、婚姻関係（とそれにともなう国家の共同統治関係）を構築したと考えていたが、運命は英雄にカルターゴーに留まることを許さず、英雄との関係は瓦解する。ディードーは彼をperfidusと詰るが、彼女自身も亡き夫に対してのみならず、女王として国民に対してもfidesを貫けずに自死する。fidesの視点を通すことで女王の悲劇の様相がいっそう鮮明に示された。

アエネーアースはイタリアでの戦争に向けてエウアンドロス王と同盟を結び、老王の名代として息子パッラースを預かるが、パッラースは敵将トゥルヌスに討ち取られる。パッラースの死は英雄が王に対するfidesを果たせなかった結果として表現されていることを観察したうえで、そのことが作品中もっとも議論の多い結末場面での英雄のトゥルヌス殺害に深く関わることを論じた。

第３章はカトゥッルス『詩集』第６４歌について、ヘレニズム的詩作の特色である知的遊戯の詩として、一方で先行作品の詩句や物語要素を取り込みながら英雄叙事詩の常套を読者に意識させ、他方でそれらから期待されるものを裏切るような形式や構成、物語展開が認められ、そこにfidesのモチーフが巧みに織り込まれていることを指摘した。詩編はペーレウスとテティスの婚礼を全体の枠組としながら、内容の大半は祝いの織物に描かれたテーセウスとアリアドネーの物語の絵解きからなる。詩の構成はテーセウスが怪物ミーノータウルスを退治して脱出した迷宮を模すかのように読者を惑わせる一方、アリアドネーの糸が脱出を可能にしたように、詩中の鍵となるfidesが、それを辿ることで知的遊戯を楽しむことができる「糸」として機能している。アリアドネーは故国を捨ててまで助けたテーセウスに置き去りにされ、彼をperfidusと非難し、神々のfidesを頼りに彼への懲罰を乞う。その結果、テーセウスはアリアドネーのことを忘れたように、父から言い聞かされた故国帰還の際の合図を忘れてその死を招くという災いを蒙る。一方で、アリアドネーは絶望的状況から一転してバックス神と結ばれて幸福を得る。頼りにできない人間のfidesに対して違うことのない絶対的な神々のfidesという対比が見られる一方で、そもそもテーセウスにアリアドネーを忘れさせたのも神々の思し召しとすれば、この展開はfidesの実現というより、すべては神慮に基づくことだったという正反対の印象を与える側面をもつことになり、そこに知的遊戯に即した諧謔が認められた。

第４章はプラウトゥスの喜劇３作品、『綱引き』、『ほら吹き兵士』、『捕虜』を

取り上げ、lenoとservus callidusという類型的登場人物に関わるfidesがありふれた劇展開の殻を破って新機軸を打ち出す道具立てとされていることを論じた。

lenoは遊女の周旋を生業とし、儲けのために不正も平気で犯す憎まれ役と決まっており、約束の反故などで主要登場人物を翻弄したあと徹底的にやり込められるのが定型の筋である。『綱引き』では劇全体の提示をなすプロログスでfidesに反する欺瞞をなす悪人に神罰が下ることが述べられる一方、lenoは劇を通じてfides違反の悪人代表のように振舞い、終盤近くまですでにお決まりの破滅を予想させる劇展開を見せる。ところが、結末ではlenoと対峙した大旦那の「lenoのfidesを使うことは求めるな。それはできないから」という科白を機に様相が一変し、lenoは大旦那と好条件の取引を結んで幕となる。大旦那の科白は「lenoのfides（fides lenonia)」というオクシュモロン（撞着語法）の滑稽さの他に、この劇ではlenoに期待される常套の展開が使えないことを暗示したメタ演劇的な効果をもつものと解された。

servus callidusは機敏に策を講じて主人を助ける奴隷で、奴隷にとって主人の命令は絶対であるので、その点で揺るぎないfidesをもつと言える。しかし仕える主人が複数になり、それら主人の求めるところが相反する状況では、献身している一人以外の主人へのfidesは見かけをつくろう芝居となる。それは一種の劇中劇としてメタ演劇的性格をもつとともに、それが芝居であると知っている観客には劇的皮肉の効果を上げる。『ほら吹き兵士』では、主人ならぬ主人に仕える状況に置かれた奴隷がこの主人への策略の一環として自分のfidesを強調することで目的を達成している。一方で『捕虜』では、主人と奴隷が戦争捕虜となり、一緒に奴隷として売られて敵国人の新たな主人を仰ぐという特殊な状況のもとに、奴隷が主人と入れ替わる「芝居」の筋が絡み、奴隷から主人に対してのみならず、主人から奴隷、またこれら主従と新たな主人のあいだのfidesの錯綜が劇的効果にあずかっていることを論じた。

（論文審査の結果の要旨）

本論文はローマ社会の基盤をなすと考えられた概念fidesが文学作品の中でモチーフとしてどのように取り入れられ、どのような表現にあずかっているか考察し、その文学的効果の検証を通じて、それぞれの作品理解に寄与することを目的としている。

fidesは「信義」、「信用」、「信頼性」、「忠誠」といった意味を有し、合意したことを当事者が誠実に履行することを求める倫理的概念と言える。それがローマ社会に重要な概念であることは明らかであり、語義研究についてはこれまでに蓄積がなされてきた（これを本論は補遺で紹介する）。その一方で、合意したことをそのとおりに実行に移すというfidesの性格は、決まった結果を想定する点で融通の利かない機械的なものであり、人間的な誤謬、予想もつかない事態の変転、驚きの発見といったところに妙味を見出す文学には馴染まないように思われることから、文学的モチーフとして捉える試みはほとんどなされてこなかった。

これに対して本論文は、文学作品でfidesがモチーフとして機能する場合を２つ挙げる。１つは、社会基盤としてのfidesがなんらかの理由で危機に瀕するような物語展開を見せる場合である。この着眼点は、キケローがfidesを正義の基盤として重視する一方で、「時と場合」によってはfidesを守らないほうがよいと神話を例として述べていることに触発されたものである。もう１つは、文学ジャンルの多くがそれぞれの常套、つまり決まった約束事の上に成立していることに関わる。約束事に忠実である物語展開はfidesに即していると見られる一方で、約束事の型ないし殻を破らないかぎり、創造性は生まれない。このジレンマそのものがfidesを介して表現されるとすれば、それはメタ文学的側面を備える洗練された創作と見なされうる。

これら２つの着眼を序論で述べたうえで、本論は第一の着眼からの検討を第Ⅰ部として第１～２章に、第二の着眼からの検討を第Ⅱ部として第３～４章に割り当てた。

第１章はシーリウス・イタリクスの歴史叙事詩『ポエニー戦争の歌』第６歌のレーグルスの挿話を取り上げた。自分の命を犠牲にして祖国の利益を図り、欺瞞で悪名高い敵国との誓約を守ったレーグルスはfidesの模範的体現者としてキケローによって称揚されていた。しかしこの詩人はレーグルスの妻マルキアを挿話に登場させて、夫が敵へのfidesを守り、夫婦のfidesをなおざりにしたと嘆かせ、彼をperfidus「fidesを裏切る者」と呼ばせる。fidesを軸に、栄光と見える行為が立場の違いに応じて暗い影になりうるという皮肉の効果的な表現を観察したことは評価される。

第２章はウェルギリウスのローマ建国叙事詩『アエネーイス』を取り上げた。第４歌では英雄アエネーアースも女王ディードーもそれぞれはfidesを誰よりも重んじる人物でありながら、決して実らぬ運命の関係を結んだことから、女王は英雄をperfidusとして敵視する一方、自身も亡き夫と率いる民へのfidesを果たせずに自害する。この悲劇を描くためにfidesが関わる人間関係の段階的な構築とその瓦解の叙述が表現効果を上げていることが論じられる。作品後半、アエネーアースは戦争に向けてエウアンドロス王と同盟を結び、息子パッラースを預かるが、パッラースは敵将トゥルヌスに

討ち取られる。その死は英雄の王に対するfidesの不履行として表現されていることを観察したうえで、そのことが結末場面での英雄のトゥルヌス殺害に深く関わることを論じた。アエネーアースとディードーの関係についてfidesを介した多層的なものとして捉えたことは評価される。

第３章はカトゥッルス『詩集』第64歌を取り上げ、知的遊戯の詩として英雄叙事詩の常套や先行作品の詩句を読者に意識させると同時に、期待を裏切るような形式や構成、物語展開のうえにfidesのモチーフが巧みに織り込まれていることを解明した。詩編はペーレウスとテティスの婚礼を大枠とし、織物に表されたテーセウスとアリアドネーの物語描写が内容の大半を占める。テーセウスは恩義あるアリアドネーを置き去りにしてfidesに背いたことから神罰を受けたが、絶望に沈むアリアドネーはバックス神と結ばれた。この展開は不確かな人間のfidesに対して絶対的な神々のfidesを対比させる効果を持つ。その一方で、すべてが神慮に基づくものでしかないという正反対の印象を与える側面をもつことになり、そこに知的遊戯に即した諧謔が認められた。

第４章はプラウトゥスの喜劇３作品、『綱引き』、『ほら吹き兵士』、『捕虜』を取り上げ、lenoとservus callidusという類型的登場人物に関わるfidesが劇作の道具立てとして機能していることを示した。lenoは遊女の周旋屋で、fidesをなんとも思わない憎まれ役だが、『綱引き』では、最終幕でそれまでのやり込められるお決まりの展開が「lenoのfides」という撞着語法の科白を機に一変する。そこにはlenoに関わる常套に従わないことを暗示したメタ演劇的効果があると解された。servus callidusは機敏に策を講じて主人を助ける奴隷で、その策略は「芝居」により劇中劇の性格をもつが、「芝居」が（実は主人ではない）主人に向けられる場合、主人へのfidesの見せかけが劇的皮肉の効果を生む。この見せかけのfidesが『ほら吹き兵士』では奴隷と主人ならぬ主人とのあいだで、『捕虜』では奴隷と主人の入れ替わりという特異な趣向を加えながら、表現効果を上げていることを明らかにした。

以上の成果は丹念なテキスト読解、先行研究の綿密な検討に裏付けられたものであり、高く評価される。とはいえ、不十分な点も見られた。具体的には『ポエニー戦争の歌』におけるfidesは他の箇所においても重要な役割を担っているが、その点には論が及ばなかった。また『アエネーイス』の結末場面の議論はやや表層的であり、トゥルヌスの戦争責任をめぐるfidesについても考察の余地があった。しかしながら、本論文が文学的モチーフとしてのfidesの有効性を示した意義は大きく、今あげた問題点もさらなる成果を期待させるものである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2024年2月14日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。